

家庭学習に関する調査研究

－大学生への調査を通して－

迫 田 孝 志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

森 藤 悦 子〔鹿児島大学教育学部〕

A research of home studying －Through some questiones for university students－

SAKODA Takashi・MORIFUJI Etsuko

キーワード：学力向上、家庭学習の内容、家庭学習の手引、教師の指導、主体的な学習態度

はじめに

学力向上は、学校教育にとって重要な課題であるが、文部科学省の全国学力・学習状況調査が実施されるようになり、問題の正答率に加え、児童生徒や学校職員への質問項目の分析も詳しく行われており、教育委員会や学校だけでなく多くの人が、関心を寄せるようになってきている。

平成24年度全国学力・学習状況調査報告書(2012)では、理科の指導として家庭学習の課題を与えたり、評価・指導を行ったりした学校の方が、理科の平均正答率が高い傾向が見られている。また、小学校では、長期休業中に自由研究や課題研究などの家庭学習の課題を与えたり、中学校では家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図ったりした学校の方が理科の平均正答率が高い傾向が見られている。

全国教育委員会及び学校では、児童生徒の学習意欲を高め、学力向上を図るために、「学習オリエンテーション」を実施したり、「家庭学習の手引」などを作成したりして、学習指導法の改善や家庭学習の充実などに取り組んでおり、その成果が期待されるところである。

1 目的

本研究では、「学習オリエンテーション」や「家庭学習の手引」などを活用した指導が重視されてきた前学習指導要領の時期に小学生、中学生、高校生として学校生活を過ごしてきた大学生を対象として、家庭学習の時間や内容等を調査し、学力向上を図るための家庭学習の在り方を検討することを目的とする。

2 方法

(1) 調査対象者：K大学生180名(共通教育科目「教育相談」の受講者)を対象とした。

(2) 調査実施日：平成25年6月5日(水)

(3) 質問紙の内容

① 家庭学習時間

小学校(1,2年、3,4年、5,6年)、中学校(1年、2年、3年)、高校(1年、2年、3年)などに分けて時間を記入する。

② 「家庭学習の手引」の有無と活用

小学校、中学校、高校でそれぞれ「家庭学習の手引」の有無、手引があった場合にはその活用状況を4件法で回答する。

③ 家庭学習に関する先生の指導

小学校、中学校、高校それぞれで家庭学習について学校の先生から指導やアドバイスを受けたか4件法で回答する。

④ 家庭学習への先生からの指導の必要性

小学校、中学校、高校それぞれで学校の先生からもっと指導やアドバイスを受ける機会があればよかったと思ったか4件法で回答する。

⑤ 家庭学習で取り組んだ内容

小学校、中学校、高校のそれぞれで宿題、予習、復習、興味・関心のある学習、塾等の宿題、読書についての取組を4件法で回答する。 など

(4) 分析

回答のあった180人全員のデータを活用し、各学校段階ごとに上述の質問紙の項目ごとに分析を行った。4件法で回答を求めた項

目については、4と3の回答群と2と1の回答群の2群に分けて分析を行った。

3 結果

(1) 家庭学習の時間

表1に各学年の家庭学習時間及び塾や習い事の学習時間の学習時間の平均を示す。

表1 家庭学習時間及び塾や習い事の学習時間

	家庭学習時間	塾や習い事の学習時間
小学1,2年生	34.41	38.30
小学3,4年生	41.84	56.68
小学5,6年生	53.85	77.54
中学1年生	60.39	67.93
中学2年生	68.27	70.06
中学3年生	109.55	115.20
高校1年生	99.44	32.68
高校2年生	114.83	33.18
高校3年生	200.45	60.50

(単位：分)

家庭学習時間と塾や習い事の学習時間は、各校種とも学年が上がるにつれ増加する傾向にあり、中学2年生から中学3年生の間、高校2年生から高校3年生間の増加が大きい。

高校1,2年生では、塾や習い事の学習時間が中学3年生より大きく減少している。

(2) 「家庭学習の手引」の有無と活用

図1は、「家庭学習の手引」の有無を各校種ごとに示したものである。

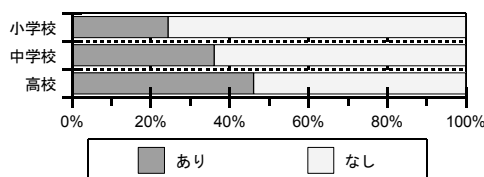


図1 「家庭学習の手引」の有無

「家庭学習の手引」があったと回答したのは小学校で24.4%、中学校では36.1%、高校で46.1%であり、小学校と中学校では「家庭学習の手引」の有無の割合には1%水準で有意な差が見られ、高校では有意な差は見られ

なかった。

図2は、「家庭学習の手引」があったと回答した中で、その活用状況を各校種ごとに示したものである。活用したと回答したのは、小学校17.1%、中学校29.2%、高校39.0%であり、小学校と中学校では1%水準で活用の有無の割合に有意な差が見られ、高校では有意な傾向が見られた。

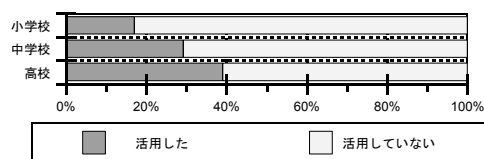


図2 「家庭学習の手引」の活用

(3) 家庭学習に関する先生からの指導

図3は、家庭学習の内容や方法について、学校の先生からの指導やアドバイスの有無を校種ごとに示したものである。小学校25.6%、中学校42.2%、高校67.2%が指導やアドバイスを受けたと回答している。家庭学習に関する先生からの指導の有無の割合は、小学校と高校では1%水準、中学校では5%水準でそれぞれ有意な差が見られた。

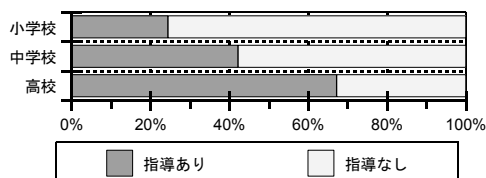


図3 家庭学習に関する先生からの指導の有無

(4) 家庭学習への先生からの指導の必要性

図4は、家庭学習の内容や方法について、学校の先生から指導やアドバイスを受ける機会の必要性について校種ごとに示したものである。指導の必要性を小学校14.4%、中学校26.1%、高校49.4%が感じており、その割合は小学校と中学校は1%水準で有意な差が見られ、高校では有意な差は見られなかった。

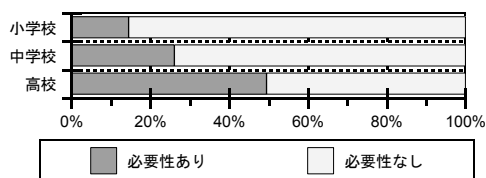


図4 家庭学習への先生からの指導の必要性

また、先生からの指導の有無と先生の指導の必要性の有無を分析した結果、各校種とも1%水準で有意な差が見られた(図5)。

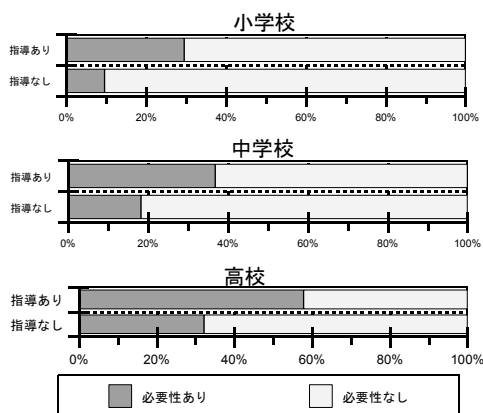


図5 家庭学習への先生からの指導の有無と指導の必要性

(5) 家庭学習の内容の取組状況

表2は家庭学習の内容の取組状況を校種ごとに示したものである。

- ① 「学校の宿題」は、どの校種とも取り組んだ割合が多い。
- ② 「自主的な予習」は、小学校、中学校では取り組んだ割合が少ないが、高校では取り組んだ割合が多い。
- ③ 「自主的な復習」も小学校と中学校で取り組んだ割合は少ないが、高校で取り組んだ割合が多い。
- ④ 「興味・関心のある学習」も、小学校と中学校で取り組んだ割合が少なく、高校で取り組んだ割合が多い。
- ⑤ 「塾や習い事の宿題」は、小学校と高校では取り組んだ割合に差は見られないが、中学校のみ取り組んだ割合が多い。
- ⑥ 「読書」は、小学校と中学校で取り組んだ割合が多く、高校で取り組んだ割合が少

ない。

表2 家庭学習の内容の取組状況

①学校の宿題	良好	不十分	χ^2 値
小学校	154	26	88.20**
中学校	144	36	62.42**
高校	160	20	108.89**
②自主的な予習	良好	不十分	χ^2 値
小学校	30	150	80.00**
中学校	52	128	32.09**
高校	115	65	13.89**
③自主的な復習	良好	不十分	χ^2 値
小学校	30	150	80.00**
中学校	61	119	18.69**
高校	111	69	9.80**
④興味関心のある学習	良好	不十分	χ^2 値
小学校	73	107	6.42*
中学校	75	105	5.00*
高校	103	77	3.76+
⑤塾や習い事の宿題	良好	不十分	χ^2 値
小学校	93	87	0.20ns
中学校	114	64	12.80**
高校	90	90	0.00ns
⑥読書	良好	不十分	χ^2 値
小学校	117	63	16.20**
中学校	108	72	7.20**
高校	70	110	8.89**

(単位：人) (** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$)

(6) 家庭学習時間との関係

家庭学習時間と各調査項目との関係を分析するために、家庭学習時間を2グループに分けることにしたが、表1に示した家庭学習時間は、30分刻みで回答されていたため分散が大きく、分布に偏りが見られた。全データを活用するためにグループ間の人数は異なるが、各学年の平均家庭学習時間を基準として家庭学習時間の多少2グループに分けてその後の分析を行った。

① 「家庭学習の手引」の有無との関係

家庭学習の手引の有無と家庭学習時間の多少の関係では、小学校5、6年生と高校1年生で有意な傾向が見られ、高校2年生で1%水準で有意差が見られた(図6)。

② 「家庭学習の手引」の活用との関係

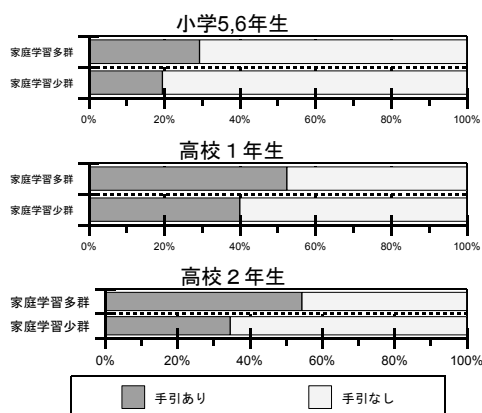


図6 「家庭学習の手引」の有無と学習時間

「家庭学習の手引」活用の有無と家庭学習時間との関連を分析した結果、小学1, 2年生, 3, 4年生では5%水準で有意な差が見られ、小学5, 6年では有意な傾向が見られた。高校1年生と2年生では1%水準で有意な差が見られた(図7)。

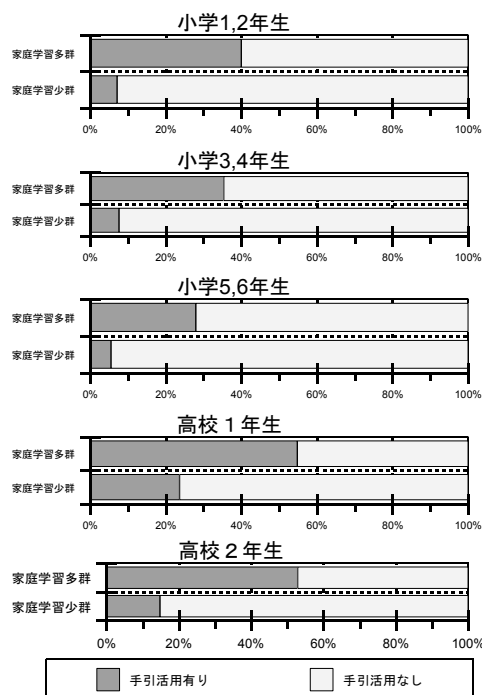


図7 「家庭学習の手引」の活用と学習時間

③ 家庭学習に関する先生の指導との関係

家庭学習に関する先生の指導の有無と家庭学習時間との関連を分析した結果、小学

校では全学年、中学校では3年生で5%水準で有意な差が見られた。高校では、1年生と2年生でそれぞれ1%水準で有意な差が見られた(図8)。

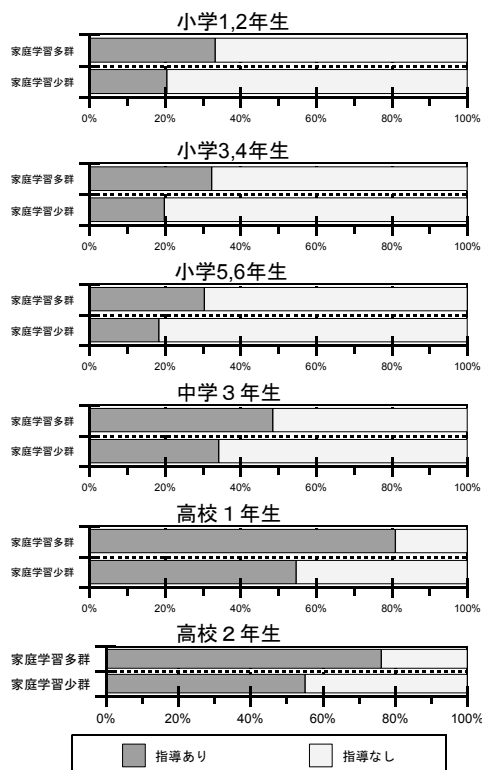


図8 家庭学習に関する指導の有無と学習時間

④ 家庭学習に関する先生からの指導の必要性の有無との関係

家庭学習に関する指導の必要性の有無と学習時間の関連を分析した結果、小学1, 2年, 3, 4年と中学1年で有意な傾向が見られた。高校では、1年生で5%水準で有意な差が見られ、2年生で有意な傾向が見られた(図9)。

⑤ 学校の宿題の取組との関係

家庭学習として学校の宿題への取組の有無と家庭学習時間の多少との関連を分析した結果、小学3, 4年生で傾向が見られ、中学校では2年生と3年生に5%水準で有意な差が見られた。高校では、1年生と2年生は1%水準、3年生は5%水準で有意な差が見られた(図10)。

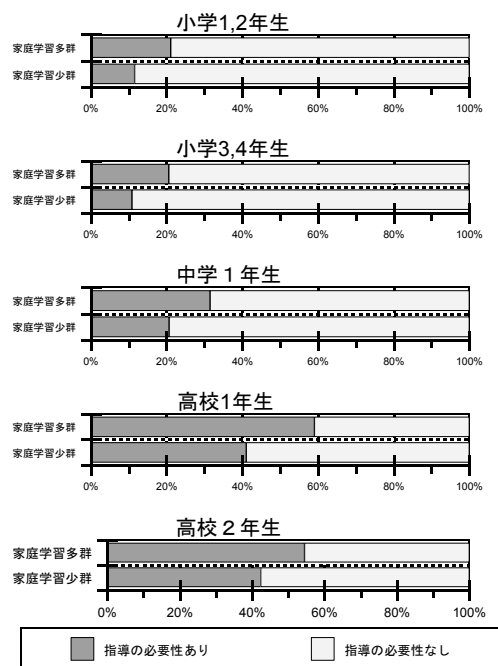


図9 家庭学習に関する指導の必要性の有無と学習時間

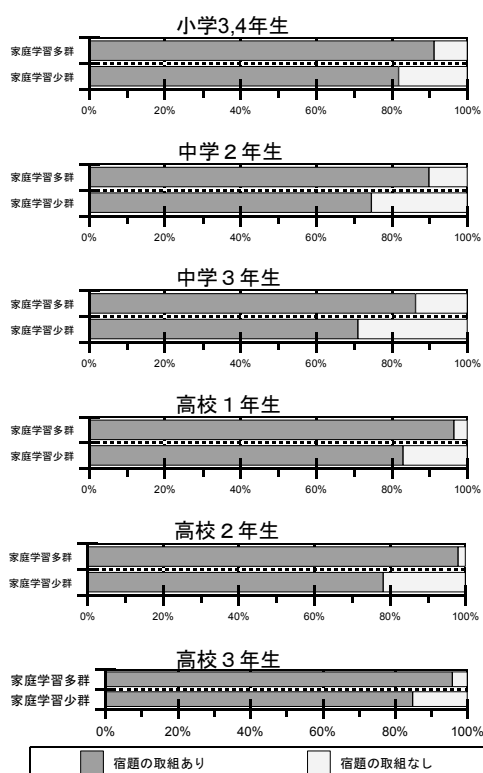


図10 宿題の取組と学習時間

⑥ 興味・関心のある学習との関係

自分の興味・関心のある学習の取組と学習時間との関連を分析した結果、小学1, 2年生で有意な傾向、小学3, 4年生では5%水準で有意な差が見られた。中学2年生で5%水準で有意な差が見られた (図11)。

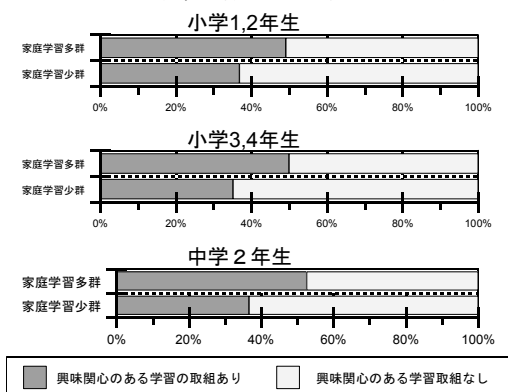


図11 興味関心のある学習の取組と学習時間

⑦ 予習との関係

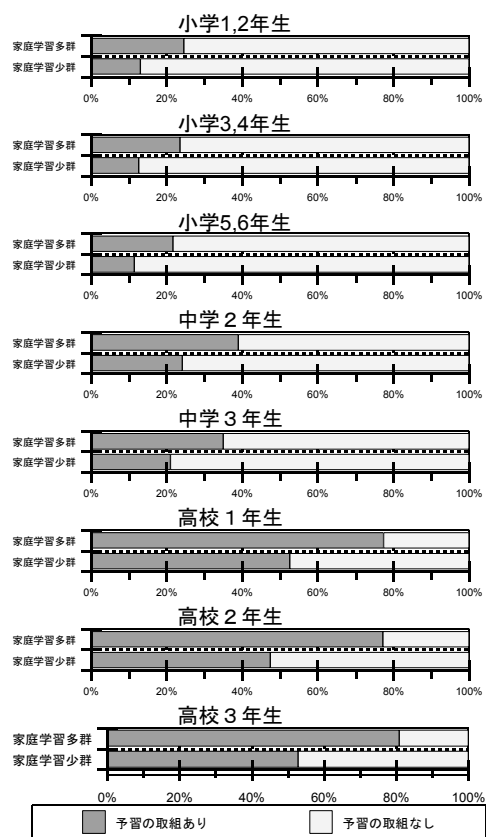


図12 予習の取組と学習時間

自主的な予習の取組の有無と学習時間の関係を分析した結果、小学1, 2年生及び3, 4年生で5%水準で有意な差が、5, 6年生で有意な傾向が見られた。中学校は、2年生と3年生において5%水準で有意な差が見られた。高校では全学年で1%水準で有意な差が見られた(図12)。

⑧ 復習との関係

自主的な復習の取組の有無と学習時間の関係を分析した結果、小学1, 2年生、3, 4年生において1%水準で有意な差が見られ、5, 6年生で有意な傾向が見られた。中学校では、1年生が5%水準で、2年生において1%水準で有意な差が見られた。高校では全学年において1%水準で有意な差が見られた(図13)。

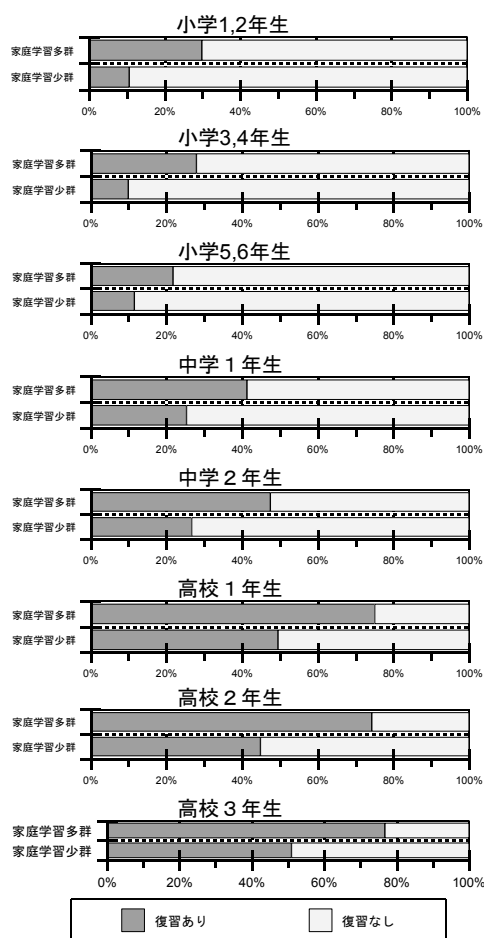


図13 復習の取組と学習時間

⑨ 塾や習い事の宿題との関係

塾や習い事の宿題の取組の有無と学習時間の関係を分析した結果、小学3, 4年生において5%水準で有意な差が見られた。また小学5, 6年生と中学1年生、高校3年生においては有意な傾向が見られた。なお、高校3年生は、唯一家庭学習時間が少ない群の方が塾や習い事の取組が多くなっている(図14)。

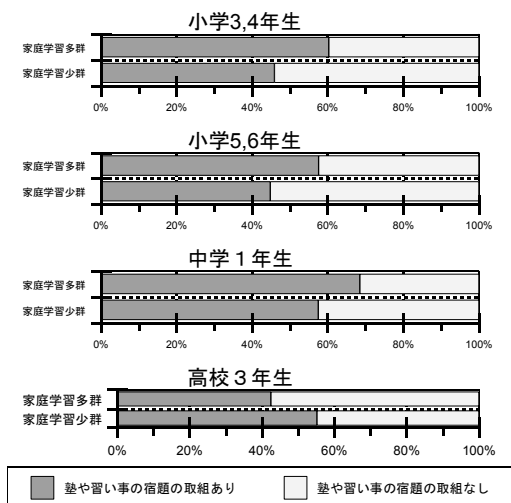


図14 塾や習い事の宿題の取組と学習時間

⑩ 読書との関係

読書の取組の有無と学習時間の関連を分析した結果、小学校、中学校、高校の全学年ともに有意な差は見られなかった。

4 考察

(1) 家庭学習時間

表1から分かるように、家庭学習時間は、中学校3年生までは、学年が上がるにつれて増加し、高校1年生で一度減少した後、再び増加に転じ、高校3年生で最大となっている。これは、中学3年生と高校3年生が受験期であることが反映されたものと考えられる。

塾や習い事の学習時間は、中学3年生まではどの学年も家庭学習時間よりも長い、高校1年生と2年生では、大幅に減少している。これは、受験のための塾での学習ニーズが低くなることと、高校では習い事をする余裕が

ないことなどが影響していると考えられる。

鹿児島県が推進している「家庭学習60・90運動」（小学校60分、中学校90分を目安に家庭学習に取り組む運動）や小学校で「学年×10+10分」、中学校で「学年+1時間」程度の家庭学習時間の指導は、表1の結果を見ると塾や習い事の学習時間も加えた時に概ね達成していると思われる。

(2) 家庭学習の手引

図1では、小学校と中学校において「家庭学習の手引」がなかったと回答した割合が有意に高いことが示されている。また、図2では、「家庭学習の手引」があったと回答した群において、小学校と中学校では活用したとの回答の割合が有意に低く、高校でもその傾向が見られている。

これらのことから、現在の大学生が小学生であった10数年前から高校生であった数年前までの間において、「家庭学習の手引」は児童生徒の手に無かったか、或いはあっても活用されにくいものであったと言える。このことは、「家庭学習の手引」を作成して、児童生徒の家庭学習の充実を図るために活用を促している教師にとって重要な示唆を与えるものである。

教師は、児童生徒の確かな学力を育成するために、学校での授業の質的充実を図るとともに家庭学習の習慣化や主体的な学習態度、基礎的・基本的な知識等の定着を図るために「家庭学習の手引」を作成して児童生徒に配布し、家庭学習の充実を促してきたが、児童生徒に積極的に活用される「家庭学習の手引」の作成とその活用方法について、具体的に再検討する必要があると考える。

(3) 家庭学習に関する指導

図4からは、小学校、中学校において家庭学習に関して先生からの指導を受けなかったと回答した割合が有意に高いことが示されている。一方、図5から家庭学習に関して先生から指導を受けた群は指導を受けなかった群

に比べて、もっと指導を受ける機会があればよかったと回答した割合が高いことが示されている。

これらのことから教師は、家庭学習に関してもっと積極的に指導する必要があること、児童生徒がもっと指導を受けたいと思うような効果的な指導やアドバイスを具体的にを行う必要があると示唆される。

特に「家庭学習の手引」との関連で考えると、児童生徒が使えると実感できる具体的な家庭学習の方法や具体例を例示し、児童生徒自身が、自分の学習方法を考え、計画づくりができるような内容の「家庭学習の手引」を作ることが大事であり、その活用方法について、適切かつ丁寧に個別指導することが大事であると思われる。

(4) 家庭学習の内容

表2から、小学校では、自主的な予習や復習、自分の興味・関心のある内容の取組は少ないが、宿題と読書はよく取り組まれている。中学校でも、小学校と同様に自主的な予習や復習、自分の興味・関心のある内容の取組は少ないが、宿題と読書はよく取り組まれている。そして、塾や習い事の宿題の取組が中学校のみで多くなっているのが特徴である。高校では、小学校、中学校とは異なり、自主的な予習や復習、自分の興味ある内容、宿題についてよく取り組まれているが、読書の取組が少なくなっている。

つまり、宿題と読書が主な内容であった小学校の家庭学習は、高校受験を控えた中学校では、宿題や読書に加えて塾や習い事の宿題が加わり、学習内容が難しくなる高校では、読書が減り、宿題、自主的な予習と復習、自分の興味・関心のある内容へと変化していることが分かる。

(5) 家庭学習時間の多少と調査項目との関係

図6から図14に示している家庭学習時間の多少と各調査項目との関連を分析した結果を、各学年ごとに整理し、有意差等があった

項目を分かりやすくしたものが表3である。

図6～図14でも分かるように家庭学習時間が多い群の方が、少ない群より「家庭学習の手引」の活用、先生からの指導、宿題や予習・復習などに取り組む割合が多いため、家庭学習時間が長くなっていると考えられる。学習時間が長ければよいということではないが、家庭学習の内容として宿題だけではなく、自主的な予習や復習などに積極的に取り組ませるための「家庭学習の手引」の活用や教師の適切な個別指導が必要である。

なお、読書のみが学習時間の多少との関連においてすべての学年で有意な差が見られなかったが、小・中学校では家庭学習時間の多少にかかわらず、読書の取組が比較的良好に行われていること、反対に高校では、全体的に読書の取組が減少していることが影響しているためであると考えられる。

表3 家庭学習時間の多少と調査項目の関連(学年別)

校種	小学校			中学校			高校		
学年	1, 2	3, 4	5, 6	1	2	3	1	2	3
手引の有無			↑				↑	**	
手引の活用	*	*	↑				**	**	
先生の指導	*	*	*			*	**	**	
指導の必要性	↑	↑		↑			*	↑	
宿題の取組		↑			*	*	**	**	*
興味ある内容		*			*				
予習の取組	*	*	↑		*	*	**	**	**
復習の取組	**	**	↑	*	**		**	**	**
塾等の宿題		*	↑	↑					↑
読書の取組									

(** $P<.01$ * $P<.05$ ↑ $P<.10$)

渡邊 (2011) は、小学校の教員へのアンケート回答から家庭学習の習慣形成に効果的な例として「家庭学習の仕方の指導法としてノートの使い方を紹介するという回答が最も多く、習慣形成に導く方法として児童の自主学習に対する教員のコメントやほめるなどの評価をすること、また、家族に対して励ましてほしいという協力要請など」を挙げている。

また、田中 (2009) は、子どもの学力を高める提言10か条の中で、「子どもの家庭学習においては、授業の予習や復習にしっかり取

り組ませるための働きかけが大切である」、

「子どもの家庭学習においては、宿題をさせるだけでなく、宿題以外の自主的学習に取り組ませることが、授業の理解度と教科学力の向上につながる」、「子どもの教科学力の向上のためには、教師による家庭学習習慣化への取組とともに、保護者と連携して子どもの家庭学習を多面的に豊かに支援することが大切である」と述べている。

これらのことから、児童・生徒が宿題だけではなく、授業と関連付けた予習や復習の方法を具体的に体得できるように、日々の授業を工夫したり、保護者の協力を得て家庭学習の習慣化を継続していくために、小・中学校が一貫した方針で家庭学習のあり方を提案したりすることが大切であると考えられる。

おわりに

大学生を対象として行った家庭学習に関する調査から、「家庭学習の手引」の意義や活用等に関する課題を把握することができた。今後、児童生徒にとって利用しやすい「家庭学習の手引」の検討、教師が児童生徒の実態に応じていつ、どこで、どのように指導すれば家庭学習の習慣化を促し、主体的な学習態度を身に付け、学力向上を図ることができるのか研究を継続したいと考える。

引用・参考文献

北海道立教育研究所2013

「家庭における学習習慣の形成に関する研究」
鹿児島県教育委員会2010

「家庭学習6090運動保護者啓発資料」
文部科学省・国立教育政策研究所2012

「平成24年度全国学力・学習状況調査報告書」
田中博之・木原俊行・大野裕己監修2009

「授業と家庭学習のリンクが子どもの学力を伸ばす」 p280 ベネッセ教育研究開発センター
渡邊誠一2011

「家庭学習の習慣形成についての指導に関するアンケート調査報告(Ⅱ)」

山形大学『教職・教育実践研究6』 pp81-87